

ニ人型結核菌ニ對スル免疫セルヲ證明シ能ハズ。

四六、ドリヤー氏「ワクチン」「オレヲワクチン」「ツベルクロプロ

テン」ノ免疫賦與ニ就テノ「モルモット」ニ於ケル實驗

稅 所 亥 二 郎 君 (大 阪 醫 大)

トリヤー氏法ニ從ツテ作製セル脫脂「ワクチン」、「オレイン」酸ニテ處置セル「オレヲワクチン」、竝ニチンサー氏法ニテ製セル「ツベルクロプロテン」ノ各種量ニテ處置セル「モルモット」ニ就テ「ツベルクリン」皮内反應及人型生結核菌ノ感染後ノ病變ヲ檢シタルニ、何レモ著シキ免疫ヲ與ヘルコト能ハズ。

四七、反復感染ノ結核經過ニ及ボス影響ニ就テ (第二回報告)

佐 藤 秀 三 君 (東 京 大 學 研 究 所)

著者ハ本會第三回總會ニ於テ強毒ノ結核菌ヲ以テ反復感染セシムルコトガ却ツテ一回ノ感染ヨリモ罹患ノ程度輕度ナリシヲ報告セシガ其後數回此ノ實驗ヲ繰リ返シ觀察ヲ密ニスルニ及ビテ尙ホ次ノ事實ヲ追加スルコトヲ必要トセリ。

一、強毒菌一・〇mgヲ每週一回反復注射セルモノハ同量一回注射ノモノニ比シ一般ニ輕度ノ變化ヲ呈スルヲ常トスルモ、就中淋巴腺竝ニ脾臟ノ變化ニ於テ其差著シキヲ見ル。

二、右ノ差ノ最モ顯著ナルハ第四週ヨリ二十週迄ニシテ其以後ニ於テ尙生存スルモノニ就キテ兩群ニ於テ此差漸次減退シ何レモ結締織ノ増殖益々多キヲ加ヘ兩者ノ區別不明瞭トナル。

三、反復注射ヲ受ケタルモノニハ十頭ニツキ約二頭ノ割合ニ一回注射ニテ終リタルモノニ比シ却ツテ變化甚ダ強度ナル

モノヲ見ルモ其變化ハ肺臟竝ニ肝臟ニ於テ強クシテ脾ハ比較的變化輕度ナルヲ常トス。
以上ヲ以テ強毒菌ノ大量ヲ以テ「モルモット」ヲ感染セシムル實驗ヲ終ラントス。

四七ニ對スル附議

一、

有馬 賴吉君

外的再感染ハ普通ニテハ非常ニ稀ナルカ又ハ實際的意義甚ダ少ナキモノナルベシト思フ證左ノ一トシテ馴地成人ノ大多數ガ結核ニ罹患スルコトナクシテ生存シ、「ツベルクリン」反應スラ之ヲ保續スルノ事實アリ。此現象ハ比較的免疫ヲ後天的ニ獲得シタル成人ガ屢々新舊ノ結核菌ニ接觸シテ免疫ヲ補足スルノ機會ガアルカラナリト思ハル。此意味ニ關連シテ佐藤博士ガ思ヒ切ツタル大量ヲ用ヒテ頻回接種スルモ雷ニ病狀ヲ増サザルノミナラズ、却テ病變輕度ナルヲ示サレタルハ非常ニ興味深ク、意義大ナリト思フ。

(自抄)

一一、

遠藤 繁清君

佐藤博士ノ御報告ハ非常ニ興味ヲ以テ拜聽致シマシタ、御報告ノ標題トシテハ反復感染トナツテ居リマスガ、其成績カラ申シマスト生菌治療實驗ト云ツテ差支ナイモノデ、結核治療法研究上有益ナ成績ト信ジマス、私モ結核ノ生菌治療法ノ可能性ヲ考ヘテ實驗中ノモノデアリマス、然シ動物實驗上有望デモ人間ニ實施出來ルモノデナケレバナリマセンガ既ニ今村博士ノ御演說中ニモアリマシタ如ク Webb, Selter 等モ生菌ヲ人間ニ應用シタコトガアリ、殊ニ最近 Møller ノ發表ニヨリマス、御承知ノ如ク Vollivulent ノ生結核菌十萬個モ亂切皮膚ニ塗入シテ居リマス、其治療成績ハ果シテ同氏ノ言ノ如ク良好ト認メ得ルヤ否ヤ別問題トシテ、兎ニ角何等害ノ無カツタコトハ事實ラシク同氏ハ特ニ之ヲ明言シテ居リマス、思フニ今後何年カノ後ニハ結核患者ノ生結核菌療法ト云フモノガ實際ニ行ハレル時代ガ來ルカト考ヘラレマス、